

子どもの障害に対する親の意識とその変化 ——聴覚障害児の親の場合——

齋藤 佐和* 志水 康雄**

異年齢の聴覚障害児で、現在、聾学校の教育を受けている子どもの親（主に母親）を対象に、障害に関わる悩みの相談相手の有無や周囲への希望について、また、障害および子どもに対する意識について質問紙による調査を行った。対象は聴覚障害2歳児、幼稚部3年生、小学部3年生、同6年生、中学部3年生、高等部3年生で、計64名の親から回答が寄せられた。回答を分析した結果、親の悩みの相談相手は障害発見後の近親者中心型から、年齢の上昇とともに多様化すること、各年齢段階に固有の問題に対し、適切な相談相手が求められていること、障害に対しては全体的に前向きの姿勢が見られ、比較的安定した障害のうけとめがなされていること、子どもの年齢による親の意識の差はあまり見られないが、いくつかの項目で、特定の年齢層の親に固有の問題がみられること、などが明らかになった。

キーワード：聴覚障害児 障害児の親の悩み 母親援助

I. はじめに

子どもの障害の発見は、両親に大きな衝撃を与える。物心両面にわたる苦労も多く、障害児のための療育、教育が開始されても、落ち着いて育児に取り組むことが出来るまでは様々な紆余曲折がある。また、一旦は障害の事実を受けとめ、前向きの対応が可能になっても、子どもの成長の節目に親の気持ちが揺れ動いたり、新たな心配が起きることもある。

障害児をもつ親のストレス、不安、発達期待などについては、精神薄弱児、自閉症児、運動障害児をもつ親を対象として、主に質問紙法による調査が既にかなり行われており^{2),3),4)}、ストレス構造に関する因子分析的研究も進んでいる^{6)-9),11)}。

聴覚障害児の場合は、昭和40年代に全国の聾学校に普及、一般化していった3歳児からの幼稚部教育の中で、親の問題は、先ず、教師主導型の教育の中に如何に親を組み入れるかという「両親指導」の枠組みで考えられて来たとみて良いだろう。これに対し、50年代以降は、0～2歳児の教育相

談および指導が聾学校の当面する課題となり、また一方、同年齢の子どもを対象とする厚生省の難聴幼児通園施設や病院、クリニック、センター等、相談・指導の場の多様化という外的変化もあって、親への対応も従来の教師主導型ではなく、家庭における母親の育児をどう助けるか、つまり専門的立場からの母親援助という考え方が浸透しつつあると考えられる^{1),5)}。

しかし、早期の補聴器装用や言語への方向づけにおいて教育の専門性が必要とされる部分も多いことから、一般的に見れば、親に関わる問題は、子どもの教育を支える一要因として「両親教育」の枠組みの中で扱われており、親の問題としての研究は、組織的な取り組みというよりも、ケース・スタディ的研究の蓄積過程であると思われる¹⁰⁾。

ところで、社会的自立に大きな困難をもつ障害児の場合と異なり、単一障害の聴覚障害児の場合は、社会的自立が可能な場合が多く、やがて親とは別の家庭を営むような場合も決して少なくない。従って親の期待や不安、また、それらを反映する育児のあり方にも固有のものがあるのではないかと思われる。特に子どもの成長過程での変化が比較的に見えやすいことから（聴力が使えるようにな

* 心身障害学系

** 心身障害学系

Table 1. 解答者の属性

子どもの年齢・学年	2歳児	幼3	小3	小6	中3	高3
回答者数(回答率)	9(64%)	12(80%)	8(57%)	11(73%)	10(59%)	14(44%)
回答者						
母	9	12	8	11	8	13
父					2	1
年代						
	20代 5	30代 10	30代 5	30代 5	40代 7	40代 8
	30代 4	不明 2	40代 3	40代 6	30代 1	50代 6
保護者の職業						
自営業		1		2	2	1
給与所得者	9	11	8	8	7	13
その他				1	1	
家族						
核家族	7	11	8	10	9	9
三世帯	2	1		1	1	4
不明						1
同胞						
なし(一人っ子)	3	5	4	1	1	3
あり	6	7	4	10	9	11
子どものもの						
主に聾学校	8	11	8	9	7	10
過去にTVRなど	1	1		2		
教育歴						
過去に普小・中					3	4
子どもの聴力						
90dB未満	1				2	1
90dB以上	8	12	8	11	8	13

る、ことばがわかるようになる、教科の学習が可能になるetc.), 子どもの年齢の上昇にともなって, 親の障害についての意識, 子どもに対する気持ちにも変化があるのではないかと思われる。

以上の問題意識に立ち, 本研究では, 聴覚障害児をもつ親の障害および子どもに対する意識について質問紙による調査を行い, 親の意識の全体的傾向を捉えるとともに, それが子どもの年齢段階に応じて異なるものかを横断的方法で検討する。またその関連事項として, 親の悩みを支える人的背景に関する現状と希望を尋ねて, それらもまた子どもの年齢段階に応じて差異があるかどうかを検討したい。

II. 方法

1. 質問紙の構成

質問紙は, 子どものデータに関するフェイス・シートに続き, 次の二つの部分から構成される。

A. 気持ちや悩みを受けとめてもらえる人の有無および周囲への希望

B. 子どもとその障害に関わる現在の気持ち

Aは選択肢からの選択, Bは50の記述項目への5段階評定を求めるものである。Aの一部およびB

の具体的項目は結果の図表 (Table 3., Fig. 1.) に示す通りである。

なお, Bの項目選定にあたっては先行研究 (藤田1974, 新美・植村1980, 中塚1984) を参考にしたが, 対象となった障害種別が異なることや, あまり悲観的な表現はせつかく落ち着いている親の気持ちを改めて動揺させかねないとの配慮から, 当初の案から修正, 削除した項目も多い。否定的表現より建設的表現を優先させ, +評価, -評価の程度によって判定するという原則で項目を決定した。

2. 対象および調査の手続き

筑波大学附属聾学校乳幼2歳児, 幼稚部3年生(5歳児), 小学部3年生, 同6年生, 中学部3年生, 高等部3年生の親, 計107名を対象として個別に郵送等で依頼し, 2~3週間後に回収した。なお回答は無記名による。

107名中回答者64名(平均回答率60%)の属性はTable 1.の通りである。Table 1.から, 回答者の大半が母親であること, 年代は子どもの年齢とともに上昇し, 給与所得者, 核家族が主流であること, 一人っ子率は小学3年生まで高いが, 小学6年生以上では殆んど兄弟がいることなどがわかる。

Table 2. 悩みの相談相手

子どもの年齢・学年	2歳児	幼3	小3	小6	中3	高3	
回答者数	9	12	8	11	10	14	
障害 発見	特に親身に 配偶者	3	4	6	4	4	5
	自分の親族	1	3	3	4		4
	配偶者の親族		2		1		
	その他	友人 2	友人 1	友人 1 先生 1 近所の人 1	友人 1		友人 1 先生 1
見 後	配偶者	3	7	2	4	3	8
	自分の親族	8	8	10	11	14	9
	配偶者の親族	7	6	4	5	9	9
	その他	友人 1	友人 4 先生 1 近所の人 1	友人 4 近所の人 1 福祉関係者 1	友人 7 先生 5	友人 4 先生 2 手話先生 3 近所の人 2	先生 6 友人 1
延べ回答数	25	37	34	42	41	44	
現 在	特に親身に 配偶者		2	3	1	2	
	自分の親族		1	2	2		
	配偶者の親族		1				先生 1
	その他			友人 1	友人 1 先生 1		
	配偶者		9	5	7	4	12
	自分の親族		7	7	6	7	7
	配偶者の親族		5	4	3	6	4
	その他		先生 7 友人 5 同級生母 1	友人 4 先生 3 近所の人 2	友人 6 先生 5 近所の人 3	友人 6 先生 3 近所の人 2 子ども(同胞) 2	先生 9 友人 7 子ども 2 手話サークル 1 同級生母 1
延べ回答数		38	31	35	32	44	

子どもは聾学校のみの経験者が多いが、中・高等部では、小、中学校段階で難聴学級、普通学級を経験してきた例が2～3割ある。

III. 結果と考察

1. 調査Aへの回答

調査Aには3項目あり、1、2では障害発見後の時期および現在の時点で、親（大部分母親）の悩みの受けとめ手について尋ねている。重みづけ（特に力になってくれた人）を伴う複数回答を求めているが、結果はTable 2に示す通りである。

Table 2. から、障害発見時に力になってくれた人は、全体としてはかなり幅広い範囲にわたっているが、「特に」という人としては、どの段階についても配偶者という回答が最も多く、次いで自分の親族があげられている。困難に直面して、身近な順に頼り、支え合おうとする状況がうかがえる。親族以外では友人、先生がどの段階にも一定数みられる。

現在の相談相手になると、全体として発見時より多様化しており、やはり配偶者、親族は多いが、

先生や友人も発見後の時期に比べ、かなり多くなっている。配偶者は発見後の特別な位置から、一般的な位置に移ってきている。この他親同士、近所の人、手話サークル指導者などもあり、中学部以上では本人の同胞も登場して、親にとっての相談相手の裾野が広がっていることがわかる。

調査Aの3では、現在、親が子どもに関する悩みをもっている場合、周囲に望む援助の形を尋ねている。結果をTable 3. に示す。

全体的には、「親同士で話し合える機会が欲しい」「担任の先生と個別に話し合いたい」が多いが、前者は特に2歳児と高等部3年生で割合が高く、学校への入口と出口で親同士の情報交換が貴重なものであることが感じられる。後者を最も多く望んでいるのは、幼稚部3年生である。担任が子どもの指導に大きなエネルギーを割くため、親の悩みに個別に対応するゆとりが充分でなかったのかもしれない。この他、目立ったのは小学部3年の親に突出的に見られた「学校とは関係のないところでの相談」の希望で、ここには普通小学校へのインテグレーションをめぐる親の複雑な心

Table 3. 希望する援助の形

	子どもの年齢・学年							全体
	2歳児	幼3	小3	小6	中3	高3		
	回答者数	9	12	8	11	10	14	
回答延べ数	14	16	9	16	13	20	88	
1.担任（指導）の先生と個別に話し合える時間をもっと多くしてほしい。	2 (14%)	7 (44%)		4 (25%)	2 (15%)	5 (25%)		20 (23%)
2.同じ立場にいる親同士で話し合える機会をもっと多ければいいと思う。	7 (50%)	4 (25%)	1 (11%)	5 (31%)	3 (23%)	9 (45%)		29 (33%)
3.学校と直接関係ないところで、いろいろの問題について相談が受けられるところがあるといい。		1 (6%)	4 (45%)	2 (12.5%)	1 (8%)	2 (10%)		10 (11%)
4.夫（配偶者）がもっと具体的に問題に関わって助けて欲しいと思う。	3 (22%)	3 (19%)	1 (11%)	2 (12.5%)	2 (15%)	2 (10%)		13 (15%)
5.血縁者にもっと力になって欲しいと思う。	1 (7%)		1 (11%)	2 (12.5%)		1 (5%)		5 (6%)
6.自分（自分たち）で何とか解決してきたし、できると思うので、むしろそっとしておいて欲しいと思う。			1 (11%)	1 (6.5%)	1 (8%)			3 (3%)
7.もう子ども自身に任せて、自分はあれこれ悩まないことにしたい。	1 (7%)				4 (31%)	1 (5%)		6 (7%)
その他		1 (6%)	1 (11%)					2 (2%)

境が反映されているように思われる。

身内への希望（選択肢4, 5）、一種の自信（選択肢6）、達観（選択肢7）も一定数はみられるが、むしろ各段階に適切な援助を外に向かって求めている親が多いと言える。

2. 調査Bへの回答

調査Bの50項目に対する回答——強く思う(5)から全然思わない(1)——の各グループおよび全体の平均をTable 4.に示し、また、これを項目の内容とともにFig. 1.に図示する。Fig. 1.では、Aは2歳児、Bは幼3、Cは小3、Dは小6、Eは中3、Fは高3の親の回答の平均を示し、▼は全体の平均を示している。

全体の平均から回答の主な傾向をみておきたい。

項目1～12は障害についての認識、子どもへの思い、態度など最も基本的な内容に関わるものであるが、項目8, 10はどのグループも一致して高い支持があり、障害児をもってから親の意識に変化があったこと、しかし前向きに取り組む意欲が強いことが明示されている。子どもへの思いは、2, 4, 6の支持が高く、5は低いことから、逃避より愛着の方が親の感情の前面にあるものと思われる。

項目12～22では家庭での育児、同胞の有無に関わって起る問題を尋ねているが、13, 14への回答傾向は似通っており、育児の基本方針へのアンビ

バレントな心情を見せている。同胞あり群ではどのグループも一致して19を強く支持している。子どもの社会的自立が現実的な目標であることの証左にもなるだろう。

子どもをめぐる他者との関係を聞く項目23～34で目立った回答は、配偶者（23～25）および他の親（31）との関係の良好さと障害を隠さない態度（29）である。ただし、一般社会の理解（32～34）は、まだ不充分だと感じられている。

項目35～45では、育児における心構え等を尋ねているが、35, 45に強い支持があり、自力で生きる力を育てるべく親自身ががんばるという積極的な姿勢が出ている。

最後に子どもの将来の見通しについては（項目46～50）、やはり心配であるというのが実情で、何らかの援助体制の必要性（48）を認める意見は、どのグループでも比較的強かった。

全体的に見て、将来への心配や、項目によっては両義的な心情もみられるものの、聴覚障害児をもつ親の前向きの姿勢が感じられる結果であった。項目表現そのものが建設的表現を優先したこと、対象とした学校が聴覚障害教育では有数の学校であるなどの事情もあるが、回答にみられた人間関係の良好さや社会的自立の可能性への信頼の強さが、前向きの姿勢を示す回答傾向を引き出した大きな要因だと推察される。

Table 4. 各項目への回答・グループ別平均および標準偏差

		2才児	幼3	小3	小6	中3	高3	全平均
項目 1	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	3.33	2.75	3.13	4.09	3.20	3.36	3.27
	SD	1.25	1.42	0.78	1.24	1.25	1.17	
2	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	3.78	4.42	4.25	4.27	3.40	4.14	4.06
	SD	1.03	0.95	0.66	0.86	1.43	0.74	
3	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	3.00	3.00	3.13	2.64	2.20	2.57	2.73
	SD	1.05	1.23	0.93	1.15	0.98	1.45	
4	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	4.44	4.58	4.13	4.09	4.30	4.29	4.31
	SD	0.96	0.64	0.78	1.00	0.90	0.96	
5	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	2.67	2.83	2.75	2.55	2.20	1.71	2.41
	SD	1.49	1.42	1.39	1.37	1.33	1.30	
6	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	4.56	4.25	3.88	3.82	4.20	3.86	4.08
	SD	0.50	0.83	0.60	0.72	0.87	0.91	
7	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	3.67	4.33	3.63	3.0	2.70	3.29	3.44
	SD	1.05	0.47	0.99	1.01	1.13	0.88	
8	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	5.0	4.83	5.0	5.0	4.90	4.86	4.92
	SD	0	0.372	0	0	0.30	0.35	
9	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	3.89	3.92	4.25	4.55	4.50	4.29	4.23
	SD	1.29	1.38	0.97	0.66	0.92	1.10	
10	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	4.56	4.75	4.63	4.91	4.80	4.5	4.69
	SD	0.68	0.43	0.49	0.29	0.40	1.05	
11	N	9	12	8	11	10	14	64
	M	3.56	3.92	3.88	4.45	4.40	4.14	4.08
	SD	0.96	1.32	1.05	0.50	1.20	0.74	
12	N	9	12	18	11	10	14	64
	M	4.11	3.0	3.25	3.27	3.50	3.79	3.48
	SD	1.10	1.41	1.39	1.21	1.57	0.77	
13	N	9	12	18	11	10	14	64
	M	3.89	4.67	4.38	4.64	4.10	3.71	4.22
	SD	1.20	0.47	0.70	0.64	0.70	1.03	
14	N	9	12	18	11	10	14	64
	M	4.44	4.25	4.63	4.27	4.30	4.36	4.36
	SD	0.50	1.01	0.49	0.75	0.90	0.90	
15	N	5	7	3	9	9	12	45
	M	2.4	2.14	2.33	3.56	2.67	2.58	2.69
	SD	1.04	1.25	1.25	1.42	1.16	1.32	
16	N	5	7	3	9	9	12	45
	M	2.8	4.71	2.67	3.78	3.78	3.33	3.62
	SD	1.60	0.45	0.94	0.92	1.31	1.43	
17	N	5	7	3	9	9	12	45
	M	3.0	4.14	3.67	3.78	3.56	3.17	3.53
	SD	1.41	0.99	1.25	0.92	1.07	1.07	
18	N	5	7	3	9	9	12	45
	M	4.8	4.43	3.67	4.44	4.00	4.83	4.44
	SD	0.40	1.05	1.89	0.68	1.25	0.37	

		2才児	幼3	小3	小6	中3	高3	全平均
19	N	5	7	3	9	9	12	45
	M	5.0	4.86	5.00	5.00	4.89	4.92	4.93
	SD	0	0.35	0		0.31	0.28	
20	N	4	5	4				13
	M	4.00	4.40	4.50				4.35
	SD	1.73	0.49	0.50				
21	N	4	5	4				13
	M	3.00	3.40	4.25				3.47
	SD	1.41	1.20	0.43				
22	N	4	5	4				13
	M	3.25	4.20	4.75				4.06
	SD	1.79	0.75	0.43				
23	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	4.33	4.33	4.88	4.80	4.56	4.64	4.58
	SD	0.94	1.03	0.33	0.40	0.68	0.72	
24	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	2.0	2.75	2.88	2.10	2.33	2.50	2.44
	SD	0.67	1.01	1.27	0.83	1.41	0.72	
25	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	2.22	2.75	1.50	2.0	2.11	2.07	2.15
	SD	0.79	1.16	0.72	0.63	0.87	0.80	
26	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	4.67	4.17	4.63	4.4	4.44	4.14	4.37
	SD	0.47	1.14	0.49	0.66	0.68	1.13	
27	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.89	4.17	4.13	3.6	4.00	3.79	3.92
	SD	1.10	1.07	1.05	0.80	1.05	1.08	
28	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.56	3.75	3.75	3.9	4.22	3.5	3.76
	SD	0.50	1.16	0.97	0.94	0.79	0.98	
29	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	1.56	2.33	2.00	1.7	1.33	2.0	1.85
	SD	1.07	1.65	1.22	1.00	0.94	1.20	
30	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.33	4.17	3.75	3.7	3.78	3.29	3.66
	SD	1.05	1.69	0.43	0.90	0.92	0.96	
31	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	5.0	4.92	4.75	4.8	4.44	4.64	4.76
	SD	0	0.28	0.43	0.40	0.83	0.61	
32	N	9	12	8	10	9	14	2
	M	4.0	4.5	3.88	4.2	4.11	4.14	4.16
	SD	0.82	0.65	0.93	0.87	0.57	0.74	
33	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.33	2.75	3.88	3.3	3.67	3.14	3.29
	SD	1.25	1.01	0.93	1.27	0.82	1.06	
34	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.56	3.08	3.14	3.8	3.67	3.36	3.37
	SD	0.96	1.04	0.65	0.75	0.82	0.97	
35	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	5.0	4.92	4.88	5.0	4.78	4.93	4.92
	SD	0	0.28	0.33	0	0.63	0.26	
36	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	2.67	3.33	3.00	2.7	2.00	2.71	2.76
	SD	1.05	0.85	1.22	0.78	1.05	1.03	

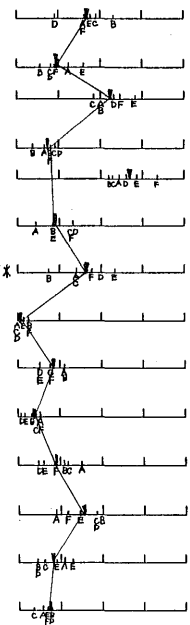
		2才児	幼3	小3	小6	中3	高3	全平均
37	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	2.44	3.17	3.63	2.10	2.33	2.5	2.68
	SD	1.07	1.14	0.70	0.83	0.94	1.12	
38	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.44	3.92	3.75	3.5	2.78	2.86	3.35
	SD	0.96	0.76	0.83	0.67	1.13	1.06	
39	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.0	2.58	3.13	3.0	2.67	2.71	2.82
	SD	1.05	1.26	1.17	1.10	1.16	1.16	
40	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	4.0	4.42	4.25	4.2	4.11	4.0	4.16
	SD	1.25	0.49	0.97	0.60	1.20	1.00	
41	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.56	4.5	3.88	4.0	4.67	3.64	4.03
	SD	1.50	0.50	0.78	0.63	0.47	1.23	
42	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.67	4.5	4.38	4.5	3.67	4.57	4.26
	SD	1.56	0.50	0.99	0.67	1.25	0.50	
43	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	3.22	3.75	4.50	3.70	3.11	2.86	3.47
	SD	0.63	1.23	0.50	1.01	1.00	1.36	
44	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	2.44	3.33	3.75	2.20	3.00	2.57	2.85
	SD	1.26	1.18	0.43	0.87	1.25	1.30	
45	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	4.89	4.83	4.50	4.80	4.33	4.5	4.65
	SD	0.31	0.37	0.50	0.40	0.67	0.73	
46	N	9	12	8	10	9	14	62
	M	4.0	4.58	4.75	4.80	4.44	4.57	4.53
	SD	1.63	0.49	0.43	0.40	0.83		
47	N	9	2	8	10	9	13	61
	M	3.11	3.08	2.38	2.20	2.89	3.15	2.84
	SD	1.10	1.04	0.99	0.87	1.1	0.95	
48	N	9	12	8	10	9	13	61
	M	4.44	4.25	4.25	4.10	4.44	4.08	4.25
	SD	0.83	1.01	0.66	0.70	0.68	1.00	
49	N	9	12	8	10	9	13	61
	M	2.78	2.42	2.88	2.60	3.33	2.92	280
	SD	0.79	0.95	0.78	1.02	0.47	1.15	
50	N	9	12	8	10	9	13	61
	M	4.44	3.75	2.88	3.50	3.89	4.00	3.77
	SD	0.50	0.92	0.78	0.81	0.99	0.68	

** P<0.01
 * P<0.05
 † 0.05<P<0.1

強く思う
 ややそう思う
 何ともわからない
 あまり思わない
 全然思わない

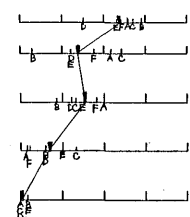
強く思う
 ややそう思う
 何ともわからない
 あまり思わない
 全然思わない

1. この子を産む前に障害の発生について知識をもっていたら良かったと思う
2. この子がかわいそうだと思う。
3. この子が憎らしくなったり、かわいくなったりする。
4. この子がかわいくてしかたがない。
5. この子の問題を忘れて一人になりたい時がある。
6. 悩んでいる時に、この子の態度やことばでかえって勇気づけられることがある。
7. 時々誰かにぐちゃや悩みを聞いてもらいたいと思う。
8. 現実をうけとめて前向きにやっていきたいと思う。
9. この子がいなかったら、障害者の存在に気がかず関心もなかっただろう。
10. 障害児をもってからいろいろな面で考え方が変わったと思う。
11. 障害児をもたなかったら、今ほど生きることの意味がはつきりしなかったと思う。
12. 人間としてちゃんと生きていければ障害の有無は大きな問題ではないと思う。
13. 家庭生活では、この子のことを中心に考えざるを得ないと思う。
14. 家庭生活では、この子のことを特別扱いにしないようすべきだと思う。



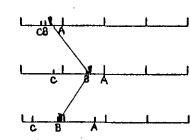
※以下の問い(15-19)は、他のお子さんをおもひの方のみお答え下さい。

15. 他の子に期待をかける気持ちが強い。
16. 他の子は、この子のために犠牲を強いていると思う。
17. この子を育てる上で、他の子は親をよく助けてくれていると思う。
18. どの子も家族の一員として、できるだけ平等に育てたい(育ててきた)と思っている。
19. 障害の有無にかかわらず、それぞれを自立させるのが親の役割だと思う。



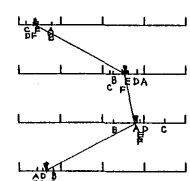
※以下の問い(20-22)は一人っ子の方のみお答え下さい。

20. 障害の有無に関わらず、子どもの育て方は難しいと思う。
21. 障害がなければもっと育てやすいだろうと思う。
22. 下の子をさずかりたいと思っている(思っていた)。



※以後は、また全員の方の御回答をお願いします(なお現在、配偶者がいない方は、23~25は、昔を思いだして書いて下さい。)

23. 夫(配偶者)はこの子について良く理解してくれており、自分にとって強い支えである。
24. 子どもの育て方について夫婦間で意見があわない。
25. 夫婦間の関心事がこの子に関することばかりになりがちで、他の話題が少ないと思う。
26. 自分の両親はこの子について理解があると思う。



27. 夫の両親はこの子のことについて理解があると思う。
28. 親類はこの子のことについて理解があると思う。
29. 親類の集まりにこの子を連れていくのをためらう気持ちがある。
30. 近所の人は理解があると思う。
31. 聴覚障害児の親同士で知り合えたことは力になったと思う。
32. 世の中の人々は障害児を特別な目で見ていると思う。
33. 世の中の人々が自分たちの苦労をもっと理解してくれたらよいと思う。
34. 世の中の人々の障害児・者に対する理解は進んでいくと思う。
35. 親としては、この子が自分の方で生きていけるような能力を育てることに力を尽くしたいと思う。
36. 親として子どもにしてやれることは、結局、経済的なこと(財産を残すことなど)ではないかと思う。
37. 子どものために何をやってやらいいかわからなくて迷うことがある。
38. 子どもにしてあげたいと思うことがうまく出来なくて悩むことがある。
39. 子どもと気持ちが通じ合わずに悩むことがある。
40. ことばやコミュニケーションの面で、どの程度まで伸びるのか心配である。
41. 学力的にどの程度まで伸びるのか心配である。
42. 行動面あるいは社会性の面で順調に育っていくのか心配である。
43. 普通児といっしょの環境(保育園、幼稚園、小、中、高等学校)で教育を受けた方がいいのではないか悩むことがある。
44. グループやクラスの中での他の子と比べて差があるように思えて悩むことがある。
45. 聾学校に通わせていても親自身ががんばらなければ子どもは伸びないと思う。
46. 子どもが将来(卒業生の場合は、これからすぐ)一般社会でちゃんとやっていけるかどうか心配である。
47. 子どもの将来のことはなるようにしかならないと思う。
48. 将来とも親や兄弟が見守ることが必要だと思う。
49. 子どもの将来については、親としてある程度の見通しをもっている。
50. 子どもの将来については子ども自身が切り開いてくれると思っている。

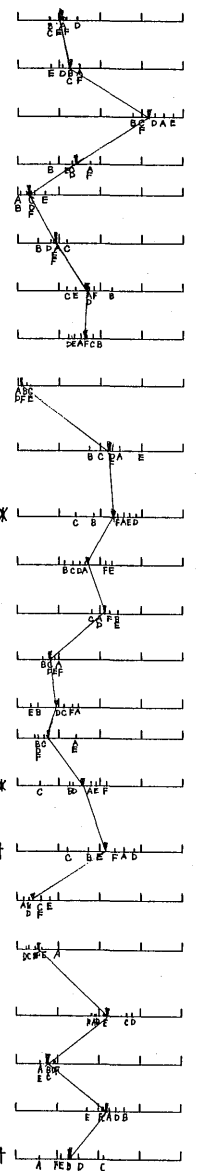


Fig. 1. 各項目に対する各グループおよび全体の回答の平均

次に子どもの年齢・学年による親の意識の差の有無を検討するため、各項目ごとにグループの平均の差の検定したところ、項目7 ($F=3.812, df=51/58, p<0.01$)、項目37 ($F=2.763, df=51/56, p<0.05$)、項目43 ($F=2.691, df=51/56, p<0.05$)でグループ間の差は有意であった。また、項目44 ($F=2.357, df=51/56, 0.05<p<0.1$)、項目50 ($F=2.334, df=51/55, 0.05<p<0.1$)では、有意差があるとは言えないが、その傾向はあることがわかった。有意差の見られた3項目については、更に2対比較(t検定、分散が同質でない2対についてはコ克蘭・コックス法による)を行った。

その結果、項目7では、幼3の親の回答の平均は、高3、小6、中3の親の回答の平均より有意に高い(有意水準5%、以下同様)ことがわかった。すなわち、幼3の親は、小6以上の親に比べ、ぐちや悩みを吐露したい気持ちがより強いことがわかる。毎日、学校に付き添い、言語の教育に大きなエネルギーを傾注する時期であるだけに、ストレスも大きいものと思われる。項目37では、小3の親の回答平均は、幼3を除くすべての段階の親の回答平均よりも有意に高いこと、幼3の親は、小6の親より有意に高い平均を出していることがわかった。小学部への進学にともない、学校への付き添い回数も減り、教育内容も言語中心型から教科学習への移行が始まり、一時的に親のなすべきことがわからなくなる状態を示しているように思われる。これに対し小6以上および2歳児では比較的迷いは少ないとみることができる。

No43でも、小3の親の意識が目立って高く、2歳児および中3、高3の親の回答平均との間に有意差があった。この項目は、普通校へのインテグレーションに関連しており、対象となった附属聾学校では、その肯否をめぐって最も親が悩むのは、この頃の時期であることがわかる。このことは、このグループの親が調査Aの3で、学校と関係のない相談相手を望む割合が高かったこととも呼応していると言える。

この他、有意差はみられなかったが、一人っ子の家庭での第二子を待たい希望(項目22)が小3の親で最も強かったことを指摘しておきたい。これは実際に小6以上の家庭で急に一人っ子家庭が少なくなる事実(Table 1.)と対応しており、子どもが小学部高学年になる頃には、親が子どもの

教育に割く時間も減ってきて、家庭生活の新しい展開が望まれるのではないと思われる。

以上のように子どもの年齢段階による回答者グループ間の平均の差がみられた項目は少なかったものの、それらの項目での各グループ間の差の検討から、子どもが特定の年齢(幼3および小3)にいる時の親の悩みの具体像が出てきたように思う。

IV. まとめ

社会的自立の可能性の比較的高い聴覚障害児の場合、親の障害に対する意識や子どもへの思いは全体的にどのような傾向を示し、また、それは子どもの成長に応じてどのように変化するのだろうか。これらを検討するために、

A. 親の悩みの相談相手や関連する希望

B. 子どもとその障害に関わる現在の気持ちについて、質問紙による調査を行った。対象は附属聾学校在籍の乳幼2歳児から高等部3年生までの異年齢層(6レベル)の子ども親で、計64名の回答があった。その結果は以下の通りである。

1) 親の悩みの相談相手は発見直後の配偶者、近親者中心型から、年齢を追って次第に多様化する。

2) 親の希望として、それぞれの年齢段階の特有の問題に対し適切な相談相手が求められている。

3) 障害に対する意識、子どもに対する思い、育児の態度は全体的に見て前向きな傾向が目立ち、将来に対する心配は残るものの、良好な人間関係と自立の可能性への信頼に支えられて安定した障害の受けとめ方がなされている。

4) 子どもの年齢による親の意識の差はあまり顕著ではなく、いくつかの特定の項目にのみ見られたが、それらは聾学校在籍児の親が当面する特定の時期に固有の問題を明らかにしている。

文 献

- 1) 愛甲洋 編(1989): 1, 2歳児の指導——お母さん方へのテキスト, 聾教育研究会
- 2) 藤田雅子(1974): 精神薄弱幼児をもつ母親の意識調査, 日本教育心理学会第16回大会論文集, 558-559
- 3) 藤田雅子(1976): 幼少精神薄弱児をもつ母親

- の養育的期待, 淑徳大学研究紀要, No9-10, 96-114
- 4) 稲浪正充・西信高・小椋たみ子 (1980): 障害児の母親の心的態度について, 特殊教育学研究18-3, 33-41
 - 5) 金山千代子(1988): 母と子の教室における母親法の試み, 聴覚障害リハビリテーション研究, 55-65
 - 6) 中塚善次郎(1984): 障害児をもつ母親のストレス構造, 和歌山大学教育学部紀要教育科学33, 27-40
 - 7) 新美明夫・植村勝彦 (1980): 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて ——ストレス尺度の構成, 特殊教育学研究18-2, 18-33
 - 8) 新美明夫・植村勝彦 (1984): 学齢心身障害児をもつ父母のストレス ——ストレスの構造, 特殊教育学研究22-2, 1-13
 - 9) 新美明夫・植村勝彦 (1985): 学齢心身障害児をもつ父母のストレス ——ストレスの背景要因, 特殊教育学研究23-3, 23-35
 - 10) 西山健・守屋国光 (1989): 自我発達からみた聴覚障害児の母親の意識の変容過程 ——手記分析を通して, ろう教育科学31-3, 111-128
 - 11) 植村勝彦・新美明夫 (1981): 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて——ストレスの構造, 特殊教育学研究18-4, 59-69

謝辞

本研究を行うにあたって御協力いただいた筑波大学附属聾学校在籍児, 乳幼グループの御両親各位, また仲介の労をとって下さった附属聾学校各部局の先生方, 項目選定にあたり御助言いただいた乳幼児グループの先生方に心から御礼を申し上げます。

Summary

A Cross-sectional Study on the Parents' Attitudes and Feelings toward their Children with Hearing Impairment.

Sawa Saito Yasuo Shimizu

In this study, we investigated by questionnaire method the parents' attitudes and feelings toward their children with hearing impairment.

The questionnaire contains two parts. Part I consists of questions about the persons who supported the parent at the time of first recognition of child's handicap and at present. Part II is made up of 50 items concerning the parents' attitudes and feelings. To each item, parents are asked to express their positive or negative sentiment.

This questionnaire were sent to 107 parents of hearing-impaired children who belong to the age groups of 3, 6, 9, 12, 15, 18, and 64 parents replied, 61 mothers and 3 fathers. The answers were analysed according to the age level of children.

The results were summarized as follows.

(1) While mother (or father) designated especially her (his) spouse and close relative as persons who supported her (him) at the time of first crisis, at present she (he) designates more diverse persons (teachers, friends, her other child etc.).

(2) Parents have a desire to consult with the competent persons about the problems proper to each age group.

(3) The parents of children with hearing impairment assume a rather positive attitudes in accepting their children's handicap.

(4) We didn't explore many changes in parents' attitudes according to age level of children, except for groups of age 6 and 9, parents of these groups having special problems: the former, psychic stress, the later, problem of integration to the ordinary school.

Key word : Children with Hearing Impairment, Stresses on the Parents of Handicapped Children, Assistance to Mothers of Handicapped Children